2016年6月16日

第７回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（浅草）のシンポジウムに参加して

オーム社　デジタル事業・新企画推進室
須山大輔

非常に示唆に富んだシンポジウムだったので，簡単ですが参加レポートをまとめました．

シンポジウムのタイトルは，「大衆化したヘルスケア・デバイスによる地域・医療現場の混乱を防ぐためのプラットフォーム作りを目指して」です．

日本プライマリ・ケア連合学会学術大会のシンポジウムの中では，少々異色なタイトルです．そのことは，学会に参加されている先生方も感じていたようで，始まる前から大入り，というわけではなく，聴取の入りは，５割程度かなといった感じで席に余裕がありました．

（始まる前は少し閑散としている？）

しかし，実際にシンポジウムが始まると，聴衆の様子がいつもシンポジウムとは明らかに異なりました．学術大会の一般的なシンポジウムのイメージは... 演者の話を聞きつつ，抄録集を見返し（次のスケジュールの確認？），スマホやPCを少しいじってみたり（メールチェックなど？），少しゆったりした雰囲気の中で進行します．

ところが，このシンポジウムでは，前方のスクリーンに映し出されるスライドを食い入るように見つめ，しかもノート（手帳）やPCなどに凄まじい勢いでメモを取っている方が多数いらっしゃいました．しかも，演者の講演中に聴衆の咳払いがまったく聞こえず，集中して聞いていることが明らかにわかりました．また，シンポジウムが始まる前に抱いていた少々異色なイメージは，実はとんでもない誤解であったようで，実際のところ，最後には立ち見が出るほど盛況でした．

では，どのようなシンポジウムだったのかを簡単に紹介し，参加された先生方はこのシンポジウムに何を期待していたのかを考えてみたいと思います．

最初に司会の古屋　聡先生（山梨市立牧丘病院）から，体温計や血圧計を例に，医療現場のデバイスの変遷や最近のヘルスケアデータへの接し方をもとに，本シンポジウムの意義と目的を簡単に紹介いただきました．

さらにそれを受けて，最初の演者である小林　只先生（弘前大学医学部附属病院　総合診療部）から，医療，特に地域医療におけるヘルスケア・デバイスの普及とそれに伴う混乱が端的に示されました．

もう少し詳しく聞きたい個所もありましたが，それらはどうやら他の演者に譲る構成になっているようなので，次の演者である原　正彦先生（大阪大学医学部附属病院　未来医療開発部）の講演にすんなりと入ることができました．

ヘルスケア・デバイスを用いるということは，そこから大量のデータが出力されてきますが，そ

のデータに対する考え方，および取り扱い方をわかりやすく説明されていました．

次に，中野智記先生（社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス東埼玉総合病院　在宅医療連携拠点「菜のはな」）が，生活があるところに医療を持ち込んで質の高いケアをトータルで提供している幸手モデルの中に，新しいヘルスケア・デバイスであるポケットエコー miruco を組み込んだ可能性を話されました．

（さて，ここらあたりで，1 時間半のシンポジウムの半分程度が経過したのですが，この頃になると席は大方埋まってしまい，ちらほらと立ち見の方が出始めました．）

このような流れの中で，並木宏文先生（公益社団法人　地域医療振興協会　与那国町診療所）の講演が始まりました．並木先生の講演は，先の中野先生の講演とは対照的に，地域の医療を地元の方々に取り戻すための問題提起でした．

最後に北村善明先生（ヘルスケア人材育成協会・チーム医療推進協議会）から，有益なデバイスを使いこなすための研修制度（教育体制）の構築や地域での使われ方のルールやプラットフォームの必要性なども報告されました．

すべての講演が終わったのは，シンポジウム終了 5 分前だったので，残念ながら，質疑応答は 2 件しかできませんでした．2 件しかなかったのではなく，2 件しかできなかったことは，閉会した後に各演者の先生方に個別の質疑に訪れた聴衆が多数いたことからも明らかです．

（質疑応答に備える演者の先生方）

（シンポジウムが終わっても続く，白熱した議論）

さて，最後にこのシンポジウムの意義を考えてみたいと思います．

なぜ，この時期に，このような形で（日本プライマリ・ケア連合学会で）このシンポジウムが開催されたのか．．．ヘルスケア・デバイスの開発は，地域に根差した医師をはじめとする医療関係者の役割では必ずしもないにもかかわらず，公募企画として採択した日本プライマリ・ケア連合学会の意図，また，このような場を設けた企画責任者である小林先生と並木先生の意思は何だったのか．．．

現在を生きる我々には，当然将来のことはわかりませんが，もしかすると近い将来に様々なヘルスケア・デバイスを活用した新しい地域医療の形が出来上がるきっかけとなる，エポックメイキングなシンポジウムに立ち会ったのかしれない，また，聴衆の方々は肌感覚でそのことを感じ取っていたので，いつものシンポジウムとは異なる雰囲気だったのかもしれない，と思いつつ会場を後にしました．